

No. 262

THE
JAPANESE
ALPINE
CLUB

April, '67



第262号

社団法人

日本山岳会

昭和42年4月号

磯野君の泪——追憶——◇

初見一雄

「旗を護れ!」。「旗を!」のセリフで舞台中央に腰を踏まえて立った主演役の手に握られた、赤茶けた旗を、残照に似た照明が、それに濃く、淡くの陰影を刻みながら、幕の静かにおりてくる。築地にあったある劇場の、そして当時評判の高かった劇の終幕である。

潮が引く、又はかえす波が沖へ遠く様に、観客が出口へ急ぐ。興奮で熱気のこもった席から数少ない出口へ、急ぐともなく、いつてぐづぐづでもない一本の筋が続いてゆく。扉近くで三筋ぐらいが急に太い一本に膨れあがって、淀みができる。動きが鈍りだしたなと思つて、ふと見るともなくあげた眼の中に、見憶えのある顔が写った「I君だ」、そつた、I君らしかったのだ。

扉の外側には、目星をつけた人間をシヨッピこうと待ち構えている特高がうろついているという、陰惨な御時勢。その鵜の目から庇おうとの劇場側の配慮からか、扉附近は灯りも薄暗くしてある。そして外へ出る境目辺りは、映画撮影でいう「フェードイン」の場面同様、群はやがて漆黒の暗に吸込まれていく。

決してさだかでもなくとも磯野君ではなかったかと思ひ、別に用件もないまま、そして対手もこちらを意識してないとの負担の軽さから、肩をたたくまでもなく、階段の方へ押されるままに、その波のアブクの一粒になつていった。

昭和四年の初め頃から、細かな泡が鍋底から浮び上り、浮び上りしていた学生登山連盟の話も、秋には沸騰をは

じめ出して、それが煮詰って結成式をあげたのは、暮に近い十一月二十一日のことであつた。

身近かに迫りつゝあつた経済界の不況を見透して、登山費用の軽減とか相互扶助を主目的とすべきであつたかも知れないが、先ず組織をつくり上げるべきだとの同志的な結びつきが主題を占めた。

ゴリ押しで創りあげたのではなかったが、僅か許りの瑕疵は、遙かに遠い隔りはあるうとも、その光明に向つての前進中に正していけると、誰しもが思った。

然し一カ年をへないうちに対立的な意見、考え方が、分封をうながす時の蜂の音をたてて、はじめて分裂か、解散かの危機を迎えることになった。

会場は何処であつたか、何月何日だつたかは憶い出せない、記録もない。沸騰しつゝある論議、水をかけ合つても果しがつかない。「休憩」の後に起つたのは磯野君である。

目頭から冷徹な頭脳の特主として我々の尊敬を集めていた彼は、静かな口調で語をはじめた。押しつけるでもない、おだてるでもない。

よく筋が通つていて、骨組みはしっかりしている。私語は止んで、静まつてきた会場は、よく透る声に耳をかたむけた。

「噓んでふくめる」この言葉が當つていのかどうか。やがて話し方がよどみだして、途切れはじめる。声が潤んでかすてくる、詰まりがちななる、泪なのだ。手巾で鼻のあたりをふきやならぬおと続ける。……静々と……たじろがぬ眼差し、遂げずんば止まじのその気迫。

デリッ、デリッと細かい「揺れ」が、次第、次第にその震度をまして、隅々迄ゆき渡るとやがて、ズシンと揺り返えしにも似た反響が、全員胸

にしみ渡つていき、何とも云えない充実した感動が場内にみなぎった。

「護るべきものは連盟の旗」であらうとならうと、無理のない説得は鮮やかなものであつた。

「決」をともまでもない、危機は乗りこえた。当時議長を勤めていた私には、直ぐに判断がついて、と同時に、彼の冷徹の陰に、それこそ生涯に一度ともいうべき、情熱漢の姿を垣間見たこと。「声涙ともにくだる」この日の場面とは、こちらの生涯にも深く刻みつけられたのである。

昭和六年三月、卒業とともに連盟の仕事から離れた。規約により学生登山

目次

磯野君の泪——追憶——

初見一雄

川崎隆章

田畑真一

富士と月見草

日本の山歩き(英文)

外国人のために

C. Conner

中華民国台湾省への登山手続

日本山岳協会

会員通信

アメリカの沿岸(坂下) N・Z・

便り(山口) カナダの山(吉永)

ネパール(三浦) 当て逃げ(渡辺)

名山に登り、高山に登れなかつ

た年 日高信太郎

図書紹介

「シルク・ロードの山と谷」と「ヒマ

ラヤの漂泊者」(望月) 白き聖地(松

田)

会務報告

諸報告

スキー懇親会(東京支部婦人部)

都岳連連達違反容疑事件

会員異動・新入会員

二

「山岳」第六〇年の評判

(一九六五年二月発行)

☆「Alpinismus」, II, '66 の図書紹介欄に出ていた(dv)とあるから多分ディレンフルトが書いたものであろう。題記のものの紹介を紹介する。

☆再び最も重要な年報が出た。第六〇巻の英文抜萃は、ヒマラヤが一編、アラスカ四編、アンデス二編(いずれも一九六四年度)となっている。

☆われわれは、詳細に書いてあるらしい日本語の方が読めないのは非常に残念だが、だからこそ、英語で説明のしである沢山の写真やスケッチ、地図などの研究が一層重要になってくるわけだ。(編集は望月達夫氏)

☆特に二枚のH・Kの地図、アンナブルナ、ランタンの二枚づつの写真、その他ギヤチュンカン、ローツェ、ゴツン・パ・リ、モディ峰、グレイシャー・ドーム等のものは優れている。

☆また、G・ハウザーが一九六五年にいた時の立派な写真をこれらに加えて研究すれば、数年前まで「白地」とされていた部分が、すっかり瞭らになることであろう。

(吉沢)

故障者が出たり、天候不良で雨にぬれ体温を奪われるとき、迷って水なく食糧少く消耗したとき、鈍、鋸のないとき、その限りでない」と戒心した。

問題の天池は通俗ながら「眼りの積の天池」と漸く命名した。来年は只見川のカゴ渡しの入口に「眼りの積の天池入口」と信夫君が標旗を立てる筈で信夫君も喜んでくれた。片道六時間のコースだ。これならどんな池か一寸行ってみたくなるだろう。あの天池の成因をたしかめたい。

尚景鶴山は「ヘイズルヤマ、すなわち這いのぼる山の宛字、ケイスル沢又北江」、頂上巖岩は「ニユウ岩で入笠山や八ッガ岳ニユウと同じ秋のとおり入れ後の稲稼にその形が似ていることからきていることは人の知る通りだ。

夏別れた鷹ノ巣の清四郎小屋の星團一君からは「平ガ岳も十月十八日の初雪後又降りまして三十センチ積った所もあり、大熊のコース横断も見られました」との便りがあった。

◇マッターホルンで21人◇

昨年、六、七、八月にマッターホルンの周辺では、記録破りの死者を出した。ツェルマットにある遭難救助隊の発表によると、この間に二十一人の死者があったという。

去年の登山シーズンの天気は非常に悪かったが、遭難死亡者の多かったのは、このためであろう。

(Alpinismus, I, 67) (I-Y)

ネパール 皇太子 東大に留学のこと

新聞報道(日経・東京)によれば、ビレンドラ・ビル・ビクラム殿下が、四月の新学期から東大に留学することになった。専攻テーマは「日本の近代化」。年令22歳、一九六四年まで五年間、イートンで修業済み。

富士と月見草
について

田畑真一



やや古い話になるが、俳人として名をたかいた富安風生氏は、昭和三十九年八月十九日の『毎日新聞』の夕刊に「富士と月見草」と題する随筆を出されてゐる。

その内容は、太宰治のいわゆる中期の佳作である『富岳百景』のなかの文に關して、二・三の疑問を出され、いっぽうにおいて太宰を回想されるといふものである。

しかし、お説には明白な誤りを見る事ができるのである。そこで本稿では、この点に關して私見を述べたいと思ふ。

ところでここにいる『富岳百景』のなかの文章とは、いうまでもなく「富士には月見草がよく似合う」の代表的な一条によつて知られてゐるそれである。ここらみに原文を示すと、つぎの通りである。

「けれども、私のとなりの御隠居は、胸に深い憂鬱でもあるのか、他の遊覧客とちがつて、富士には一瞥も与えず、かえつて富士と反対側の山路に沿つた断崖をじつと見つめて、私にはその様が、からだがしびれるほど快く感ぜられ、私もま

た富士なんか、あんな俗な山、見
度くもないという高尚な虚無の心
を、その老婆に見せてやりたくな
って、あなたのお苦しみ、わびし
く、みなよくわかる、と頼まれ
せぬのに、共鳴の素振りを見せて
あげたく、老婆と同じ姿勢で、
ぼんやり崖の方を眺めてやっ
た。

老婆も何かしら、私に安心して
いるところがあったのだらう。
ぼんやりひとこと、

『おや、月見草』。

そういつて、細い指でもって、
路傍の一箇所をゆびさした。さ
つと、パスは過ぎてゆき、私の
目には、いまま、ちらとひとめ
見た黄金色の月見草の花ひとつ
、花卉もあざやかに消えず残
った。

三七八米の富士の山と、立派
に相對峙し、みじんもゆるがず
、なんと云うのか。金剛力草と
でも言いたいくらい、けなけな
しく立って、あの月見草は、よ
かった。富士には、月見草が
よく似合う。」

☆ ☆ ☆

この原文に対する富安氏のご意見の
第一点は「月見草の飛躍に同情できな
い」というのである。

第二点は「いったい太宰は岳魔生活
のいつどこでどんな機会に、あの天啓
の？を授かったものだったか」という疑
問である。

第三点は「富岳百景」を読み返し
てみて、ああこれなんだなと、思
い当たるとふしがわたしにはみつ
からない。だれにきいても、しか
とした答えは得られまい」とい
う自信に満ちた断定である。

以上は富安氏のご意見を、便宜上、
三点にわけ掲げたわけであるが、
いずれもじつはまったくナンセン
スなものである。

なぞなら太宰も『富岳百景』のなかの別の条で「ここにさらに、月見草を選んだわけは、富士には月見草がよく似合うと、思込んだ事情があったからである」と明らかにしているからである。

すなわち富安氏のいわれる天啓は、太宰が御坂峠で文筆生活を過こしていいたときに授かっている。くわしくは引いたときに語る通りであるが、麓の郵便物を受け取りにいったその帰りのパスのなかにおいてである。またたき同じバスに乗り合わせた「老婆の癡したとりごと」にヒントを得ている。

以上より、三点のお説には、その疑問にお答えできるとともに、同時にその誤りを指摘できるのである。

☆ ☆

つぎに問題とすべきことがらは、原文にはっきりとした解答が示されているのにもかかわらず、どうして富安氏は右のような疑問をいだかれたのであるかということであろう。

これはすなわち、富安氏が『富岳百景』を精読されていないことを、みずから露呈された結果によるものであから露呈には、読み返してみたと思えているが、これは事実と反することであつたのである。

これらのことがらは、読者に対する一種の欺瞞行為といふべきである。お説の誤りもさることながら、これが対象の書である『富岳百景』をなぞおざりにしていられたのであるから、許しがたい失態である。

わたくしは富安氏のかずかずのすぐれた俳句に精神生活のひとつのうをおいを見い出さるものであるが、氏の文学を愛するにあたり、あえて無作法な妄言を述べねばならない。

× × × × × × × × × ×



SOME ADVICE TO FOREIGNERS WISHING TO HIKE AND CLIMB IN JAPAN'S MOUNTAINS

GLENN · CONVERSE

The foreign traveler to Japan, who comes to climb and hike in her mountains as well as view the beauty of her culture and her people, would be wise to know a little about this increasingly popular recreation before he embarks on a journey there himself.

A complete line of equipment can be found in Tokyo and other major cities. If the would-be hiker or climber is less than about 5'-10" to 6'-10" (175 to 180 cm.), he will have little trouble locating clothing, packs, shoes, skis, and whatever else, in his size. The taller foreigner must be prepared to bring some of his own equipment. I speak from direct experience, as I am 6'-2" (188 cm.). The average Japanese is about 10-15 cm. shorter than the average Westerner. From what I have seen, I would say the equipment is of good quality and well suited to the weather conditions of Japan's mountains. There is not yet

much Japanese down clothing or down sleeping bags. Imported items will be more expensive than those in your own country. So bring those items of personal gear you can least do without, and trust that anything not brought can be bought in Japan. And remember that anything (except may be for skis and rock-climbing helmets) can be individually made on quick order. As Japan is every bit as industrialized as Western nations, there is an abundant supply of nylon, plastic, aluminum, etc., for creating every conceivable product.

You, as a foreign traveler, can expect a great amount of quickly changeable weather. From talking to other people, I would compare the Japan Alps with the Cascades of Washington or the Southern Alps of New Zealand: rugged, steep, heavy snow in winter, a large amount of rain in all months. One difference, however, is the complete lack of glaciers in Japan. If you are mentally prepared for wet weather, then your stay here can be quite enjoyable. Almost every Japanese carries an umbrella with him or her to the mountains. I have tried also but because the wind can play havoc with an umbrella, I prefer to carry a rain poncho or parka.

Trails, in general, are well-kept, well-marked, and well-traveled. Trail signs are in Japanese, though, so maps are quite helpful.

While maps are also in Japanese only, there are comparatively few problems in finding one's direction, and location. The maps show the many huts scattered throughout the mountains, the elevations in 20 meter contour intervals, and principal streams and rivers. The most useful maps are those that have a scale of 1:50,000 and cover 10' of latitude and 15' of longitude. Because of the rugged character of most Japanese mountains, trails follow either ridges or river valleys. There is little opportunity for cross country travel.

Water is readily drinkable everywhere. There may often be no water between huts, so a water container is helpful. If you want to travel light, then make use of the huts, which are rarely located more than a half day's walk from each other. For about 1000 yen (\$2.80) you can receive warm bedding and two Japanese meals. For the large foreigner, the meals tend to be small and almost totally lacking in protein. Rice is the staple food.

Usually, you can buy a can or two of fish at the hut. But I suggest you bring along some food supplements in addition to your own lunch food (unless you like rice for lunch, too). If you travel during August, when all of Japan appears to be in the mountains, it may be difficult to secure lodging at a hut. During the other months that they are open, I suspect there will be no problem obtaining lodging. I should

add that May, early June, the last half of July, all of August, September, and most of October are the best times for visiting the mountains. The rainy season lasts for about a month (roughly June 10 to July 10). Typhoons are frequent during August and September.

Some uniquely Japanese customs. Travel to and from mountain areas is well organized, with frequent train and bus service. Be assured, however, that transportation facilities are CROWDED. On any winter weekend, trains contain incredible numbers of skiers. During Golden Week, roughly the first week in May, and during the months of July and August, the mountains are jammed with people. I often wonder why Japanese go to the country when conditions on the trails and ski slopes are so bad. "Communism with nature" is impossibly hard to secure. Somehow, everyone gets there and back, although I think that for many the trip on the train and bus may have been the most tiring time of all.

Crowds should not deter you from taking the opportunity to visit the higher country. If you keep in mind that an awful lot of people enjoy being in the mountains and have a tremendous enthusiasm for hiking, climbing, and skiing, then you, too, can go and enjoy yourself. Because there

are few foreigners who venture into the mountains, you will find many people curious about you. All will be friendly to you, and even if you cannot find a common spoken language, you can communicate in the unspoken language the mountains share with her travelers.

Unfortunately, because of the tremendous numbers using the trails and slopes, there is a definite problem with respect to trash and garbage. No one, apparently, has taught Japanese to keep the mountains clean of cans, paper, and other non-organic material. You will see large piles of trash near the huts (Mt. Fuji is notoriously bad) as well as bottles and cans scattered along the trail. If I were dictator in this country for one week, my first edict would be that everything carried in must be carried back out. Japanese have a strong sense of personal cleanliness and just a little bit of education should convince them that they cannot throw away indiscriminately their trash when they are in the mountains.

Maybe you ask why they bring in so many cans, bottles, and paper products in the first place. The concept of America's freeze-dried and dehydrated foods have not yet reached Japan. Consequently, Japanese carry incredibly heavy and huge packs (up to about 50 kilograms, which for a 65

kilogram man is an awful lot of weight). They put everything in but the kitchen sink. Of course, they must have rice at least twice a day. Add to that the necessary preparations which can only be obtained in bottles and cans and you have the makings of a food truck on foot. Hopefully, someone will discover that it isn't so much more expensive to use the light weight food so commonly found in the mountains of western America and then everyone will follow suit. In fact, if you have access to some of these dehydrated food preparations in your country, bring them with you to Japan. You will have a very curious audience, if you care to cook for yourself.

One custom I love-the Japanese onsen, or hot mineral spring bath. After you return from the high peaks, but before you start back home, stop a while at an onsen. What a delightfully relaxing experience. During the winter season, practically every ski lodge has its own onsen, where you can daily soak tired and aching muscles. Just be sure you bring a small towel and soap with you(also if you hike in the mountains), as usually none are provided at the onsens. You may have heard that the Japanese baths are terribly hot compared to your usual bath temperatures. It's quite true, but you will soon discover that you won't boil. Just grit your teeth, tell yourself it

doesn't hurt, sit down, don't move, and before you know it you'll be just as happy as the next fellow.

I suppose I could go on for a long time and explain in more detail. However, I suggest you wait until you come to Japan and then make inquiries as to places to visit, routes to take, food to bring, and so on. You will find that several people in the Tokyo Japanese Alpine Club (JAC) speak excellent English (as well as other languages) and will only be more than willing to help you make your stay an enjoyable one. Have a Japanese-speaking person contact the JAC office (404-7657) and locate the phone number of some English speaking member. Men such as Sekiguchi Shuya (family name is given first), Horikawa Ejirō, Matsuda Yūichi, and Suzuki Hiroyuki can be of great assistance to you.

Do come and enjoy the beauty of Japan and meet with her people.

お知らせ

◇シヤムニー国際アルピニスト集会について◇

本件については会報二六〇号にて紹介したが、その後正式にフランス国山岳連盟より招待状が届いたのでお知らせします。

尚、候補者については、目下海外連絡委員会において検討中である。(松田)

◇山岳61年号頒布についてのお知らせ◇

理事会

山岳61年号は近日中に刊行の予定であるが、昭和41年度の新入会員に対する頒布に説明不充分の点があり、誤解されている方もあると思われるので、確認の意味で補足説明致します。

記

- (1) 入会金五、〇〇〇円の中には、「山」は含まれており、入会の当該月より頒布される「山岳」は含まれておらず、従って新入会員で「山岳」を希望される方には、「割引」の価格で購入して頂くことになった。
- (2) この点は、定款第七条に「入会承認の通知を受けたときは、直ちに入会金を払込むものとする。但し、入会の当該年度は年会費を納入することなく、入会の月より会報の頒布を受けることができる」と説明されているが、但し「山岳」は含まれないと明記されていなかったため、一部の方は入会金三、〇〇〇円に年会費一、〇〇〇円、計五、〇〇〇円と解釈され、従って「山岳」の頒布を受けられず、思われた方もあった様である。
- (3) そこで常務理事会では、昨年十二月十九日にこの件を検討し、昭和41年度に入会した新入会員に対してのみは、特別に全員に無料で山岳61年号を頒布することを決めた。(会報二五九号一五頁参照)
- (4) 但し昭和42年度からは、事前にこの点をよく徹底しておき、頒布は行わない。
- (5) 従って昭和41年度の入会者で「山岳」が欲しい方に入会金の他に会費を納入された方の会費は、42年度分に繰越させてもらいます。

◇中華民国台湾省(の)登山手続について◇

(日本山岳協会)

この度、台湾山岳協会の尽力によって、かねてから懸案となっておりました玉山・雪山への登山が簡素化され、観光ビザで登山出来るようになり、従来長期必要だった手続も二ヶ月位に短縮され、招聘の可否が分るようになりスピードアップされました。

以下当協会ととりきめました入山の手続要領をお知らせいたします。宜しくご承知の上手続きその他手ぬかりないようご配慮下さい。

I 観光ビザの手続(玉山・雪山への登山)

- (1) 対象地域 玉山・阿里山・東埔山登山口 雪山・南山・環山両登山口
- (2) 往復は同じルートで縦走は不可

- (3) 提出書類 計画書二〇部、写真(パスポート判)一人一〇枚ずつ、日本山岳協会推薦状、提出者へ送付される。
- (4) 提出期限(原則として二ヵ月前)

- (5) 提出窓口 宛先「中華民国台湾省体育会山岳協会 会長 周百練 住所「中華民国台湾省台北市天水路四十五号」
- (6) 提出期限(原則として二ヵ月前)

- (7) 提出書類 計画書二〇部、写真(パスポート判)一人一五枚、日本山岳協会推薦状
- (8) 提出窓口 前と同じ
- (9) 提出期限(原則として六ヵ月前)

- (10) 玉山登山(六〜八月の場合) 十二月末日迄に
- (11) 冬山登山(十〜二月の場合) 四月末日迄に
- (12) 入国・入山期間計画書通り
- (13) 承認機関 中華民国教育部(日本の文部省に該当)
- (14) 提出された計画書は政府教育部で承認されたものに限り台湾省山岳協会が招聘状を発行し、提出者に送付される。
- (15) 甲種地域 山間部のバス道路以外の所
- (16) 乙種地域 バス道路並びに山間観光地
- (17) ※山岳協会推薦状手続について 各都道府県加盟団体に限ります。それぞれの会長の紹介状添付の上、日本山岳協会(東京都渋谷区神南町二五、日本体育協会内)へ申請のこと。
- (18) 昭和四十一年十一月十一日 日本山岳協会

- (19) 以上の通りです。日本山岳協会推薦状の申請手続は、それぞれ所属の地方県岳連を通して協会に申請して下さい。
- (20) (大塚博美)

- (21) 普通ビザの手続(登山を目的とした渡航)

- (22) II 普通ビザの手続(登山を目的とした渡航)

- (23) (1) 対象地域 玉山・雪山を除いた甲種入山地域。玉山・雪山からの縦走
- (2) 提出書類 計画書二〇部、写真(パスポート判)一人一五枚、日本山岳協会推薦状
- (3) 提出窓口 前と同じ
- (4) 提出期限(原則として六ヵ月前)
- (5) 玉山登山(六〜八月の場合) 十二月末日迄に
- (6) 冬山登山(十〜二月の場合) 四月末日迄に
- (7) 入国・入山期間計画書通り
- (8) 承認機関 中華民国教育部(日本の文部省に該当)
- (9) 提出された計画書は政府教育部で承認されたものに限り台湾省山岳協会が招聘状を発行し、提出者に送付される。
- (10) 甲種地域 山間部のバス道路以外の所
- (11) 乙種地域 バス道路並びに山間観光地
- (12) ※山岳協会推薦状手続について 各都道府県加盟団体に限ります。それぞれの会長の紹介状添付の上、日本山岳協会(東京都渋谷区神南町二五、日本体育協会内)へ申請のこと。
- (13) 昭和四十一年十一月十一日 日本山岳協会
- (14) 以上の通りです。日本山岳協会推薦状の申請手続は、それぞれ所属の地方県岳連を通して協会に申請して下さい。
- (15) (大塚博美)



会員通信

◇アメリカ沿岸◇

坂下心一

夢のように過ぎさりました印バ、オーストラリアの船旅のあとは、カリフォルニアのサンフランシスコからはじまりました。とりわけ十二月二十六日73マイル遠方の海上より生れて始めての四〇〇〇米峰、メキシコの Nevado de Colima (二〇〇〇のピーク (4,118 ft. & 12,765 ft.)) を見ましたときは、さすがに興奮いたしました。正月をカリブ海ですごし、アメリカ南部をめぐり歩きましたが、ミシシッピの河深く、古いたたずまいを残したニュー・オリアンズには全く夢中になり、がむしやに歩きまわった次第です。

こうしてパナマ運河に帰って参りましたが、いまだに霧のミシシッピやアラバマのことが、ちらつきまします。今年もよろしく御指導の程お願い申し上げます。一月二十六日、パナマにて(吉沢一郎宛)

◇N・Z・便り◇

山口節子

大変ごぶさたいたしました。予定より帰りを延期してしまつて申し訳ございません。あまり思い通りの山登りができなかったのが武田、山口の二人が、(お金はないけれど、時間があるため必死の計算の末です) また Mr. Cook area に入りまして。五日に亘り Mt. Minard だけ登ることができましたが、二月二三日と新雪があつて、雪崩も落ちていましたし、クレヴァースも大きくなって、その上ラッセルがひどく苦勞しました。七日には Maile Brun を試みたのですが、これは岩登りの連続で、十五時間岩の上でした。本当に大きな山です。頂上までもう二―三時間かかったらうと思います。とにかく私たちの岩登りのピッチでは無理でした。そして、他の山もラッセルのことを考えてあきらめて昨日下つてきました。N・Z での最後の山登りも終つた訳です。二十六日夜東京着の予定ですが、会の方をすっかり留守にして申し訳ありません。会の皆様に宜しくお伝え下さい。

(二月十日付、松田宛)

(編者注) 同隊の岡部隊員は二月二十日、海路帰国。山口、武田隊員も二月二十六日夜 JAL にて無事帰国した。秋田隊員は現地に八月頃迄逗留の予定である。

◇カナダの山◇

吉永定雄

前略、会事務所経由由葉書頂戴いたしました。帰国の御挨拶が遅れており申し訳ありません。昨日は東京から今井雄二様が来阪され、カナダのことについてお話し上げました。

初て私達の会の方の結末はアメリカからメキシコに足を延ばして九月下旬

及び十月上旬にメキシコの三火山、ボカテペトル、イスタシワトル、シトラルテペトル(ピコデオリサバ)の登頂を果し、十二月末迄に全員帰国、終了いたしました。アメリカの旅はクリンチさんにお会いしたりして楽しかったのですが、一般にどこへ行っても同じような感じでメキシコ入りして初めて息をふき返したように旅の楽しさを味わいました。三山の登りは技術的な問題は全くありませんが五千米台の高度をはじめ経験いたしました。クリンチ氏は一夕楽しい時間をお宅で持ちましたが丁度南極行の話が出たところだったので、あれからあと随分お忙しい日を送られたことでしょう。まだ手紙は出しておりませんが、もう帰られていきますか。

先ずは御礼を御挨拶。

二月十二日

(吉沢一郎宛)

◇ネパール・バルブ工場建設調査旅行

三浦義明

出発に際してごたごた忙がしく、お会い出来ず残念でした。十四日夜半デリー着、今日迄万事順調にこちらのスケデニールを終り、明十七日カトマンズに入ります。案内に下さる日本プラント協会のカルカッタ支所長山崎氏は、学生時代 JAC の団体会員だったそう。山のお話もお聞きしました。

ネパール国内の調査旅行には、オフィサーとして Narendra Banskra 氏が同行とのことです。出発直前当方の希望を入れ、スケデニール延長、東はジャバから西はネパールガンジまで(途中一回カトマンズに戻る)ボカラにも入れそうです。十八日、十九日、ネパールのお祭も見られそうです。明日今頃はカトマンズで宮原君のグリーンラン

ドの話の聞いている頃と思います。次回ニューデリーへ帰ってくるのは、三月二十日前後の予定です。会の皆様に宜しくお伝え下さい。(二月十六日付、デリーにて、松田宛)



当て逃げ されるの記

渡辺公平

医者というのは聞かなければいけません、という教訓を今度はつくづく身を以て体験した。右のヒザがちよっと具合が悪いので辰沼ドクターに診てもらったのが一月末。二月三日には吾妻から蔵王の方へ行く、用事があるのでもスキーをはいてもいいかと伺いをたてたら、元来安静にしておくべきものだから、スキーはやらないうえに温泉にでもつかって来るんだと、悪いことしたらしくわるんだから、と一本大きな釘をさされた。

吾妻ではドクターの命を守ったのだが、蔵王では折角地蔵まで登りながら、ロープウェイで下りてくるのも頑だ、一回くらいやってバレルことはあるまいと、ザンゲ坂から大平コースへいい気持ちで滑ってきたまではよかったのだが、上ノ台のグレンデへ出た瞬間、背後からカミナリ族に体当たりされた。

常に後方警戒を怠らずに降ってきたのだがこうもたてずにつかつてこれられては、名人でない悲しさヒラリと

体をかわずいとまもない。その結果が左膝骨、開放性骨折、両踝部骨折、全治三ヶ月という負傷である。おまけにオフセットというのか、なにから知らんが鋭いエッジで向う膝を骨まででえられていたため、蔵王温泉にある蔵王診療所に入院、少なくとも二週間はムシ入りですと、その阿部所長に宣告された。それが二月五日の夕方。

やっぱり悪いことはできぬもの、辰沼先生のいいつけさえおとなしく守っていたら、殊勝な気持ちになつてみたら、「エヘヘヘ」と得意の笑いをもらしている先生の顔を思い出したりして病床生活二十日、二十五日やつと釈放されて東京に帰った。

診療所において驚いたのはスキーの負傷者の意外に多いこと、毎日少なくとも三十人くらいはやってくる。多い日には百人を超える。これがグレンデの交通事故ばかりではないのだから混雑だけが原因でないことは確か。トレイニング不足、リフト、綱具、スピード一般に指摘されているような原因が互いにかんではいるのだろうか、山と同様自分の技術を無視した滑降の多いのが最大の要因ではないか。

グレンデに出る時は自動車と同じようにバックミラーでもつけたい。スキーヤー用のを考えたら人助けにもなるしもうかるだろう。ついでながらお見舞状を頂いた諸賢に誌面を借りてお礼申し上げます。

◇お知らせ◇

熊本支部所在地変更
熊本県庁舎の移転に伴い、昭和四十二年三月三日より本会熊本支部の所在地が左記の通り変更になりました。

熊本市出水町九一五番地
熊本県庁山岳会内

(電話) 熊本66-11、11-1 内線
二二六西健一あて



名山にのほり
高山にのほれ
なかつた年

日 高 生

だんだんからだやワになるにつれて、むつかしい山のぼりはもちろん、じぶんで出かける山のぼりが少なくなってくる。今年もその例にもれなかった。

二月勿々ジュネーブに往復十日の旅をした。天気がわるくて会議のあい間にモン・ブランを遠望できた日はまれだった。しかし、行き帰りと飛行機の窓からマッキンレーを眺めることが出来た。三月福岡に行ったときは古墳や遺蹟をたずね、唐津では鏡(領布)山(二八四米)にのぼり、次いで名護屋城址に立つて韓半島のほうを望んだ。

四月はじめ鈴鹿に行き、ケープルで御在所山(二二〇米)にのぼり、翌日雨をついて藤内谷を下り、車で鈴鹿峠を越えて近江に入り、琵琶湖をめぐった。カールレーと称する(ヘンな乗り物で打見山(二〇三米)に引き上げられ、比良の主峯、武奈ヶ岳(二二四米)を眺め、湖北をまわって、リフトでのぼった賤ヶ岳(四二二米)を打ちどめにした。

月末には日本山岳協会の海外登山技術研究会に出て、柵池までスキー組のあとを追ってテクった。

晴天の鈴鹿を見たいという県当局の希望がかなって、五月末の再遊は好天に恵まれた。こんどは湯の山から車で竜ヶ岳の南石梯峠(六八九米)まで往復した。

六月はじめのウエスタン祭もうでは、梓川ぞいのみちがこわれた直後に行きあわせ、大まわりして木曾路に入り、萩原から松峠を越えて、引き返したところと眼と鼻の奈川渡に出た。中旬に越前若狭海岸を一巡した折り、三方五湖群の梅丈岳(三九五米)と小浜湾頭の久須夜ヶ岳(六一九米)に車で登り、外海と湾、湖と半島が入りまじる珍らしい景色を眺めた。

下旬は香川県に行つて、白峯の崇徳御陵に詣で、黒峯、赤峯、青峯(四五〇米)などいづれも五色台をまわり、屋島(二九三米)にも上った。

七月月中旬箱根で集会があったとき、ひとりで神山(一四三八米)と駒ヶ岳(一三二七米)にのぼった。どんだん開られて俗化する箱根でも、神山ぐらゐはこの俤に残しておいてほしいものである。

下旬には加波山(七〇九米)から筑波山(八七六米)にまわった。加波山は存外よい山だが、石切り場が山腹をえぐっているのは惜しい。二山をつなぐ山稜には林道が開け、ジープを通じる。

八月はじめ広島、山口、島根三県にまたがる西中国山地をめぐる、高原や峡谷をたずねたのち、鏡ヶ成の国民公園大会に参列し、翌日中河と一さんや村井米子さんなど大ぜいで大山(一七三三米)にのぼって大汗をかいた。佐野勇一さんはじめ地元山岳会のかたにお世話になった。

引きつづいて信濃山岳学校の校長に

引き出され、酒沢に二泊したとき、酒沢岳にでもと思つて出かけたが、小屋で時間を食つたため、ザイディングラートで時間切れ。

九月に入るや茶谷会員に誘われ梓会(旧海軍経理学校同窓会)の一行に加わり、上養沢から日の出山(九〇二米)、それから御岳にまわった。田部重治さんと御岳で落ち合い、一同歓談したのは楽しかった。

中旬には立山に出かけた。雄山のぼりは天気が悪くて室堂止まり。代りに芦峰寺の中宮祈願所と岩峰寺の前身拝堂にお参りした。

下旬には天竜川と奥三河に行ったところ、台風に出くわした。秋葉山(八四〇米)にのぼった時はまたよかつたが(十数年前山火事が出て頂上にある火伏せの神様の本殿が焼けてしまい、今は麓に鎮座します)、愛知県の最高峰茶臼山(一四一五米)は風雨のなかを車で頂上直下を半まわりしただけ。風来寺山(六八四米)にのぼる時は快晴になった。

十月月上旬ニースで十日ばかり続いた会議のあと、むすこと車で「アルプス道路」をたどり、二千米級の荒涼たる峠を四つ越えた。眼目のロータレ峠(二〇五八米)ではつめた雨が横なぐり、峠からもしものラ・グラヴィの村からも、霧がふさふさした水河ばかりで、ラ・メイジュの高峯は見えなかつた。

十一月三日東京支部の諸君と秩父の大霧山(七六七米)から高峯高原に遊んだところ、快晴でいささか雨男の汚名をそそいだ。

五日から下半島に出かけ、大湊から車で釜臥山(八七八米)にのぼり、恐山をたずね、帰りは盛岡から松尾鉱山経由秋田県境まで九分通り出来た新県道をジープでこなし、三十分たらず歩いて八幡平(二六三三米)の頂を

ふみ燕の湯に下った。秋田がわの新道の開通には二年ぐらゐかかるだろう。帰るとすぐ静岡の諸君に加わって大井川のみじかに出かけ、鹿肉を満喫し、翌日雨の中での宿まで往復した。この辺は十三年まえに歩いた頃の趣がまだ残っていてなつかしかった。

暮も押しつまつた十二月三十日、ひとりで相模大山(二四五五米)に出かけた。煙霧で遠見がきかなかったが、よい天気と静かな山を存分に楽しんだ。

韓国東国大学山岳部遠征隊来日
去る二月十日に鄭延、姜声允、李成満三氏の訪問を受けた。

鄭氏は韓国東国大学哲学科主任教授で今回は、同大学の開校五十周年と同大学山岳部創設十周年を記念する行事である第二次日本北アルプス遠征隊の隊長として、姜氏は同隊のリーダー、李氏は隊員として来日した。

この遠征隊は前記三氏を含めた九名からなり、去る一月二十五日九州へ上陸し、九州大学山岳部OB西野氏外四名の同行を得て、二月二日上高地へ入り、二月五日西穂高岳へ登頂した。東国大学山岳部は、一九六四年五月にも第一次として来日、北アルプスに登りこの時の資料を基にして今回積雪期の西穂高岳登頂を遂げたわけである。

また、東国大学は、福岡の山荘会、九州大学探検部が訪韓した時の招請者であり、今回はその交換として九州大学の招請に応えて来日したもので、このように日韓両国交流登山と両国岳人の親善に大きな役割を果している。

なお、今回の来日を記念して、白地に山とビッケルの図柄、日本北アルプス遠征隊、東国大学山岳部、MOOREAの文字を配した、きれいなペンントを本会に寄贈されたので併せて報告する。(関口周也)

今年主として自然公園審議会委員としての視察旅行だったせいもあるが、よくもこんなに低い山ばかり歩きましたもの、と、じぶんながら呆れる。しかし名山と云われるものは、低くてもそれぞれ独自の風格を備えており、むかし山を開いた高僧や先達の見識や、信仰に導かれてのぼりつづけた人たちの風情がしのばれて、けっこう楽しめる山のぼりの対照になることをさとしたのである。

(十二月三十一日記)

◇ネパール民族美術展◇

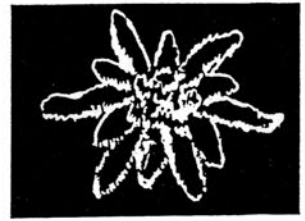
ネパール王国大使館、東海大学共催、外務省、文部省、日ネ協会並びに本会後援の標記展覧会は、昭和四十二年一月四日より十一日まで、東京新宿の京王デパート六階ホールで開催された。展示された美術品は、東海大学探検部、神原達氏、伊藤和洋氏等により蒐集されたもので、中でも国宝級の多羅菩薩等の仏像が目玉された。又会場にかざられた各種民芸品、又風見武秀氏のカラー写真も好評であった。

オープニング・セレモニーは一月四日午前十時、バンダリ駐日ネパール大使を迎えて行われたが、本会からは三田副会長が出席して挨拶をのべられた。この開会式には、他に本会より、武田名誉会員、深田評議員、松田理事はじめる多数が出席した。

尚、この展覧会は、本会会員星野紀夫氏の努力により、実現したことを付記しておきます。(松田)

—お知らせ—

会報綴り込みファイルの残部が若干ありますので御希望の方は事務所へお申出下さい。無料で差し上げます。尚地方の方で郵送御希望の方は送料として65円を御負担願います。(松田)



★ 図 書 紹 介 ★

「シルクロードの山と谷」と 「ヒマラヤの漂泊者」

『世界山岳名著全集』第一巻に収められている吉沢一郎氏訳の「シルクロードの山と谷」(G・N・カーソン著)は、原著が既に七十年前の刊行にも拘わらず、今日でもなおバミール周辺の地誌、探検史を知ろうとするものにとって、最も重要な文献である。

訳者は、その前書きによると三十年も前に本書を入手し、読みあさったようである。もともと本書は、一登山者の登山記のように、内容の面白さとか描写の美しさに意味があるようなものではなく、著者カーソンの実際の踏査と、その精力的な研究の結果を克明に記録したものであるから、訳文も流麗な邦語である以上に、何よりも正確を要求されるものであり、そのためには、訳者自身がバミール周辺の地理的乃至探検史的の該博な知識をもっていることが望ましい。その点では、本書の訳者として吉沢氏はどうってつけの人はいないであろう。

邦訳は極めて良心的であり、数多くの原注のほかに、訳者による訳注が夥だしくどこに、且つ新しい事項(とくに山や峠の標高など)も随所に加えられている。これらは、読者の想像を絶するわずらわしい作業であり、こ

ういうことに従事した者でない、その苦勞はよく判らない。ただ、原注と訳注との区別が、はっきり明示されていない箇所があるが、いささか惜しい。なお、題名はやはり原著どおり「バミールとオクサスの水源」とした方がよかったと私は考える。

巻末に添えられた原書からの地図の複製(訳者によって見事に略図化されている)と、バミール周辺の山々の部分図十葉とは、多くの文献の中から吉沢氏が苦心して蒐集し、且つ自らの手で略図化したもので、一つの書物にこれだけの山々の図面をまとめたものは、全く初めての試みであるだけに、本書の価値を高めている。地図作製についても、従来からすぐれた能力をもっている吉沢氏の立派な仕事と言えよう。これと同じ意味で同氏の得意な「バミール探検登山年譜」が十八頁に亘って表示されているのも、読者に親切であり、且つ利用価値は大きい。

とも角、バミール周辺の知識を得たい者にとっては、カーソンの本書と、訳者による付図及び年譜とは、欠くことのできぬ基本的文献として永く残るであろう。

つぎに同じ第一巻に収載されている加納一郎氏訳の「ヒマラヤの漂泊者」(C・G・ブルース著)にも一言しなくてはなるまい。

原著は既に発行当時(一九三四年)からヒマラヤの主要な文献と目されていたものだが、三十余年後に、わが国の極地研究家としてまた山岳研究家として知名の加納氏によって邦訳されたことは、まことに喜びに堪えない。多くの著書訳を残した加納氏の訳文が読み易い日本語となつてゐるのは当然のことであろう。読者は、この訳書によって早期のエベレストとして最も偉大であったブルースの一生

を、興味深く知ることができると同時に、このヒマラヤのバイオニアから幾つかの貴重な助言を得ることができであろう。

ただ、内容の一部が省略されている点は惜しい。全訳しておいていただきたかったと思う。また、私が愉しく通読していた途次、気のついた誤りを二、三挙げておく。

一四三頁下段十一行目、すぐれた画家のオスカー・エッケンシュタインは誤りで、すぐれた画家は前のA・D・マッコーミックにかかぬ。エッケンシュタインは画家ではない。

一八六頁上段から下段へつづくところ。「峠の上からは、大アラクナンダの谷に近いたボバンまで下る。アラクナンダの流域には一八〇〇メートルのダウリが立っている。」意味がおかしいので、原書にあたる。「峠の上からタボバンへ下る。そこは標高一八〇〇メートルで、大アラクナンダ河とその支流ダウリ川との出合に近い」とした方が正しい。

二〇六頁下段十行目、ゲルトールド・ベル嬢は英国人なのだからガートルードが普通である。なお、その四行あとにはベルトルドとあって、これは明らかに誤植、この高名な登山家のことは、曾て松方三郎氏がラジオで話されたこともある。

二二一頁上段七行目、ママリはママの誤り、ママリはロングスタップとガールワへ行ったことはない。

「固有名詞のカナがきには異説もあるだろうが」と訳者は本書の解説に書いておられるから、とくにふれないが、なお幾つかの疑問を感じるものがある。

断わっておくが、私は挙げ足とりのつもりで以上の点を指摘したのでない。平素、校正の誤りなどで敵しいお考えをおもちの訳者にして、なお間違

いの避け得ないことを、本書を通読して痛感したため、書きとめておくまでである。

◇ 白き聖地 ◇ Weisses Helligtum

山田圭一 著

本会会員山田圭一氏(五五八〇番)の私家版山岳写真集である。一九五五年五月には「写真感光機構に関する基礎研究」によって日本写真学会より技術賞を受けた、この方面での専門家であるが、山岳航空写真の撮影にかけても知られており、「岳人」一九六六年一月・六月にその作品を発表されているので御存知の方もあることと思う。

氏は山崎隆一氏等パイロット諸氏にも恵まれ、軽飛行機による優れた山岳航空写真の作品を生み出し、又一九五四・五五年西独政府交換学生として、ゲッティンゲン大学、スライブルグ大学に留学した際、ヨーロッパ・アルプスを訪れたが、その時からの夢であったヨーロッパ・アルプスの機上撮影を、一九六五年に果たし、山岳パイロット「P.O.」のヘルマン・ガイガー氏の協力のもとに素晴らしい作品をもたらした。

氏はあがきに、「一通りの遍歴がすむと、今度は撮りためた作品を本に

しておきたいという強い願いをおさえることが出来なくなりました。それは作品をまとめることによって、一人の人間が、くるしみとよろこびの交錯の中で生きつづけ、山に魅せられつづけてきたという事実が、時の流れによって失われつつのたない記録として、歴史の中に刻みつけられるかも知れないからである。そして著者として、このささやかな記録を、学問についてと同様に、山行についてとまたない良き先輩である、恩師牧島象二先生に捧げることのできることを、何より幸福に感じている」と出版の動機と感想を記しておられるが、こうした気持の現われが随所にみられる。

六十四頁の素晴らしいグラビア写真の中、半数の三十六頁が、剣、槍、穂高、富士山等の国内の写真、残りの二十八頁が、ヨーロッパ・アルプスのマッターホルン、モンブラン、グランド・ジョラス等の写真であるが、航空写真はさすがにすぐれており、貴重な資料である。

巻末には山岳航空写真撮影についての諸注意や想い出が収録されており、この方面に関心のある者には、参考になる。

尚写真の説明には邦文の外に、ドイツ語でも説明がつけられているが、この写真集の国際的価値からみて、当然のこととはいえ、本書の価値を高めていると思う。

布表装、B5変型、グラビア64ページ、本文9ページ、一九六六年七月、山田圭一発行(私家版)尚本写真集の希望者は、実費一、〇〇〇円(送料共)を添えて左記へ申込めば入手できる由。
東京都足立区千住中居町68、山田圭一宛



常務理事会

▽日時 一月六日、六時三〇分

▽場所 加藤常務理事宅

▽出席者 加藤、辰沼、村木、松田、飯野、宮下、川崎各常務理事

▽議事 (1)山岳62年号編集者検討の件

決定迄の間、原稿執筆依頼等についての事務は村木理事が代行する。

(2)来年度の理事会の構想、新役員等につき検討する。

常務理事会

▽日時 一月二十五日、六時三〇分

▽場所 日本橋電報館

▽出席者 加藤、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、宮下、川崎の各常務理事、東京支部野田委員。

▽議事、報告事項 (1)東京都岳連選挙違反容疑事件報告。

(2)本会の支部のあり方につき検討。

(3)来年度の理事会の構想、新役員等につき検討を行った。

二月理事・評議員会(九日・ルーム)

▽出席者 松方会長、理事・加藤、辰沼、村木、松田、飯野、広谷、竹田、川崎、長尾、平山、小方、倉知。

評議員・深田、藤井、石原、村井、中田、堀田。

(以下委任) 渡辺副会長、理事・大塚住吉、宮下、竹内、評議員・折井、吉沢、中尾、津田、高山、監事・松本

▽議事・報告事項

(1)昭和四十二年役員候補者推薦の件
一月の理事・評議員会の席上、理事会の年令層を上げた大型理事会の構想が出されたが、その後の情勢の変化、加藤常務理事の健康状態等からみて、この案は再び白紙に戻して常務理事会で再検討したいとの申出があり、本件は三月の役員会迄の間常務理事会にて再検討することになった。

(2)昭和四十二年予算案(素案) 概要説明の件。

各理事からの予算要求にもとずき、野常務理事が作成せる素案につき、概要説明あり、若干の質疑応答がなされたが、本件についても、この会では説明に留め、次回迄に常務理事会で再検討することにした。

(3)その他

①本会所蔵絵画貸出の件……(松田) 信濃支部より返事がありA-25、A-50号の二点は、松本市の民俗博物館に貸出することを承認する。

②夏山診療所の報告……(長尾) 厚生省からの助成金は十三校と本会の富士山頂診療所の計十四校に配分して使用したが、此の度患者診療数の集計ができた。

これによると、診療せる患者の総数は五、五四四名。内訳は内科三、四二名、外科一、七五〇名、その他三七二名となっている。

③自然保護憲章について……(村井) 自然保護協会では、目下自然保護憲章を作成中であるが、登山の面からみて希望、意見があれば申出で欲しいとの要望があった。

④支部報告

(イ)信濃支部東信グループの招きで加藤理事、深田評議員の二名が丸池の長野短大ヒュッテの集会に出席した。(二月四日・五日)

(ロ)東京支部

東京都岳連の選挙違反容疑事件

につき説明あり。

⑤学生部の件 (以上)

常務理事会

▽日時 二月十六日、六時三〇分

▽場所 日本橋電報館

▽出席者 加藤、辰沼、村木、大塚、松田、飯野、川崎、宮下各常務理事

▽議事 (1)来年度理事会の構想、新役員の人選等につき検討する。

(2)協会、都岳連、東京支部と本会との関係につき検討する。

常務理事会

▽日時 一月二十日(金) 午後六時三十分

▽場所 本会ルーム

▽出席者 吉沢、牧野、丹部、神原、芳野、関口、松田各委員。

▽議事 (1)山岳六十一、海外発送先検討の件

(2)米國ラトガー大学冬富士登山隊来日の件

(3)来年度新委員候補者検討の件

(4)芳野委員のフラスカからの帰国報告

(5)定款改正の件

(6)ガストン・レヴィニエ来日の件

(以上)

東京支部

二月一日(水)役員会

出席者 石原、沼倉、野田、野萩、西丸、鈴木、廣谷、小味、富田、細井、関口、須田、松永。

1報告事項

(イ)スキー講習会の件(関口)

(ロ)都岳連に関する件(野田)

(ニ)ニュージーランド親善登山隊に関する件(広谷)

現地よりの連絡に依り、山口、武田両名は改めてタスマン地域に入り、帰国は二月下旬の予定。岡部は帰国の為乗船、秋田は七月頃迄現地に滞

◇定款改正認可さる◇

文部省に対し申請中の定款の一部変更の件は、本年二月六日付認可になった旨、東京都教育委員会を通じて連絡がありましたのでお知らせ致します。改正の内容については会報二五二号十頁で説明しました通りですが、この中、第二十三条、第四十八条の二点については、改正が認められませんでしたので、御訂正下さい。

定款改正認可さる

文部省に対し申請中の定款の一部変更の件は、本年二月六日付認可になった旨、東京都教育委員会を通じて連絡がありましたのでお知らせ致します。改正の内容については会報二五二号十頁で説明しました通りですが、この中、第二十三条、第四十八条の二点については、改正が認められませんでしたので、御訂正下さい。

この定款施行についての細則は、理事会および総会の議決を経て別に定める。の総会は、社団法人である以上省略できないこととあります。

尚、改正認可された定款の全文は「山岳61年」に収録してありますので、御参照下さい。

◇Kuchevskaya(470m)◇

ソ連領、カムチャッカ半島の東端にある活火山、クルチエフスカヤが、一〇月六日夜噴火し、火口から熔岩、火山灰を多量に噴出したという。

ルーム誌(24年2月)

1日(水)東京支部役員会

9日(木)定例理事評議員会

15日(水)三水会

17日(金)海外連絡委員会

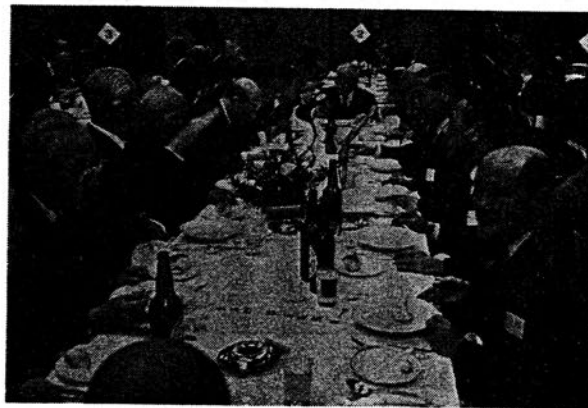
他に土曜会4・11・18・25

昭和41年度

年次晩餐会スナップ

少し? 遅くなりましたが、首記の写真掲載します。大分立派なおつむが沢山並んでいるので、又お話の種が増えるでしょう。遅れたのは撮影者(自前)たる羽田栄治君が悪いからです。悪しからず。

(IY)





★スキー懇親会★

東京支部婦人会

恒例のスキー懇親会を今年は尾瀬戸倉スキー場に於て二月二十五日(土)から二十七日(月)にかけて催しました。出発も帰京も三バティに分れそれぞれ都合のいい日に参加すると云う気楽な集まりだったのですが、それでも土曜日の夜おそく戸倉の藤原さん宅に全員揃う事が出来、金曜日から行っている先発隊手作りのオデン鍋を囲んで賑やかに夜中まで食べたり笑ったりで過ぎました。

日曜日は眠い目をこすりながらそれでも八時に起きバスでスキー場に出発。お天気はとも良かったのですが折り返しTBSのナマ放送にぶつかり、その為スキー場は芋の子を洗うような混雑ぶりでした。それでも適当に滑ったり転んだりして夕方まで楽しく過ごしました。日曜日の夜ニュージラードから山口さん武田さんが帰られるので三名午後の汽車で早々に引き揚げ二名が夜中にそして四名は月曜日まで残って人影のまばらになったゲレンデで思う存分滑り夕方全員帰京しました。婦人会では日頃家事や子供さんの世話で遠出の出来なくなった方々がこのように集まりに多勢参加されて親睦をはかりたいと思っております。今回は小原さん、芳野さんがいらして下さり大変良い集まりでした。

参加者 小原晴子、斎藤かつら、増田

洋子、奥川雪江、若村松枝、芳野菊子、須田紀子、川井通子、富田美知子、以上九名
係 富田

都岳連選挙違反容疑事件

新聞紙上で大きく報道された本件も、本会とは直接には、関係ありませんが、この度東京都山岳連盟加藤副会長名義により、その間の事情を説明する、お詫びの文書がまいりましたので、会の記録にとどめる意味でこの全文を掲載させて頂きました。

記

拝啓 寒冷の候貴下益々清栄の事と存じます。

さて、本連盟副会長石井一清名義により各加盟団体代表者宛発送された本会長平井義一の衆議院議員立候補に付ての昭和四十二年一月八日付41都岳連発第32号および第35号の文書に関する選挙違反容疑事件につきまして、深く反省し、関係各位に御迷惑をお掛け申した事を心よりお詫び致します。該文書につきましては、理事長石田稔郎が単独により事務職員に発送せしめたものであります。

本件が理事長の単独行為であることが明らかにされたとは言え、スポーツ団体としての本連盟の業務とは全く関係の無い此の種の事件について、組織的な名称の使用されるようになっていて、この今迄の本連盟のあり方について真剣に反省を要するものと思ひます。

このように、本連盟の組織、及び姿勢の問題、理事長に単独行為を為さしめた執行機関のあり方の問題については深く反省したいと存じます。遭難事故多発により社会的な注目を受けている折から、本事件により登山者全体が、社会人としての自覚に欠けるがごとく印象づけられたことは、まことに残念であり、深く自責の念にたえませ

ん。

ここに関係各位および広く社会全般に對し、また特に、全国の登山者とその団体に對し今後は、かかる不祥事の無きよう期したく、また私どもが登山界本来の任務に粉骨努力できましように、大方の御叱正と御教導をたまわうべくお願い申し上げますと共に深くおわび申し上げる次第であります。

昭和四十二年二月

東京都山岳連盟

副会長 加藤泰安

日本山岳会東京支部殿

東京支部忘年会

一九六六年の締めくくりとして恒例の忘年会が十二月二十一日、本会ルームで行われた。神谷名誉会員の挨拶、乾杯で賑やかに開会し、先ずは新入、今井会員の長唄、新曲浦島船宿の銘調子から始まり、折井会員の高山音頭、山下会員の角兵衛歌など、いかに山岳会の忘年会らしく、大いに笑いに飲食した。しばらくは閑談の後、支部二十周年山行として行われた大霧山ハイキングの模様を清水会員のカラー8ミリで観賞、勝田会員の見事な手品に大喝采し、最後に会員諸氏の苦心の傑作、プレゼントの交換を行い、珍品、奇品の披露に大いに湧き、忘年会讃歌を合唱のうちに楽しい一夜を終えた。

(参加者)

清水、小林、今井、篠、伊藤、雁部、山崎、岡本、進藤、諸岡、小原、山口、松田、関口、松下、富田、大川、綿織、小松山、山口、折井、斎藤、都筑、広羽、若村、沼倉、堀川、野田、三浦、山下、広谷、玉井、吉武、神谷、牧野内、河野、須田、吉崎、西丸、山口(堀)、川俣、広瀬、勝田、尹、加藤、林、武田、計四十七名(広谷)

クリンチ、南極より戻る

クリンチがピンソンから帰って来て左記のような便りを呉れた。(3・19付)

戻ったら一月一五日付の手紙が来ていて嬉しく思いました。今大変忙しいので簡単に御報告します。

帰国勿々ワシントン(DC)へ行き、National Geographic Magazineのための記事を書いたり、一万枚の写真や八時間半の映画の整理に忙殺されました。記事は六月号に載りますが、出たら写真と一緒に送ります。

スマイスの「ワインバー伝」多謝、随分苦労したことでしょう。それから「山と溪谷」発行のカレンダーと「日本の山々」も有難うございました。

今度の南極行は大成功でした。全員が登ったのは、Vinson Massif, Shann, Gardner の三峰です。最難峰はTiree でしたが、これは、一月六日に Barry Corbet と John Evans が登りました。これからワシントンで講演を三回やり、又、映画の整理にとりかかります。

吉沢一郎様

勿々頓首。

計 報

豊田千歳氏（会員番号五八六〇番。昭和四十年二月入会。紹介者、坂口敬一郎。深田久弥）

東京薬科大学OBの豊田千歳氏は、本年二月四日、胃ガンのため逝去されました。享年二六歳。謹しんで哀悼の意を表します。

（遺族）逗子市久木九四、父豊田重夫

「熊肉を食う会」

山形支部

五月三日から五日まで二泊で、先年実施しました朝日山麓大井沢に於て、首記の会を久々で計画しました。

五月三日朝山形着—左沢—大井沢峠—大井沢一泊。四日志津—月山—志津一泊。五日下山。スキー持参可。

詳細は、本会事務所又は直接左記へお問合せ下さい。

山形市旅籠町二ノ二ノ三〇

後藤幹次

集 記

編 後

★題号を「山」と変え、会員の皆さんの御意見を参考にして、2000年までに五回、レイアウトを工夫してみました。

★そこで、右のうちどれがよいか、皆さんから御意見を頂きたいと思ひます。宛先は、本会事務所、締切りは四月末。多数の御意見に従い、役員会にかけて、最終案を決めます。

(吉沢一郎)

昭和四十二年四月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三二 外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎

頒価五十円

(404) 七六五七

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話 (352) 1556・1557

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
送 料 別 受 け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端2~15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)

工場：大阪工場（堺市）、東京工場（戸田町）

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

あなたのネガから、大型パネル（枠）張り

お部屋の飾りに！ 贈りものに！

山 岳 写 真 を

(本多善博)

本 多 写 真 工 房

名古屋市南区柴田西町 1-16 電話 (611) 7047

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング（構図）で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。

ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後5日以内に製作発送いたします。

代金は着品後10日以内に送金下されば結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。

但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申し上げます。

- | | | |
|------------|-------|--------|
| ■全紙半切 | パネル張り | ¥1,000 |
| ■全紙 | | |
| ■(新聞1ページ大) | | ¥1,500 |
| ■全紙2倍 | | ¥4,000 |

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。